

四旬節第三主日 2014.3.23

サマリアの女

ヨハネ福音書 4章 5-30、39-42 節

4:5 それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。

4:6 そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。

4:7 サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。

4:8 弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。

4:9 すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。

4:10 イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」

4:11 女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。」

4:12 あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」

4:13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。

4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」

4:15 女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来な

くてもいいように、その水をください。」

4:16 イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、

4:17 女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。

4:18 あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」

4:19 女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。

4:20 わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」

4:21 イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。

4:22 あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。

4:23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。

4:24 神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」

4:25 女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」

4:26 イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

4:27 ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話

しておられるのですか」と言う者はいなかった。

4:28 女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。

4:29 「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」

4:30 人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。

4:39 さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。

4:40 そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるように頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。

4:41 そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。

4:42 彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」

説教

サマリアの女として知られるヨハネ 4 章 1-42 節がきょうの福音朗読箇所です。

洗礼志願者教育のための四旬節の古典的朗読配分を踏まえ、今年は今日が

「水」来週が「光」再来週が「復活」これら水・光・復活をテーマにして洗礼の意味を説き明かすという流れにもなっています。

<いのちの水>

4:14 わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。

イエスがサマリアの女に水をくださいという場面から始まり、話が進んでいくうちにイエスが女に水を与えるという話になります。女がその水をくださいといったら意地悪をいって女を困らせる。くじけることなく女は礼拝とはなにかという論議をふっかける。イエスは霊と真理をもって礼拝するのだと答える。女はさらにキリスト・メシア論でいいかえすが「それは、あなたと話をしているこのわたしである」というイエスのキリスト宣言で二人の会話

は閉じる。そしてサマリアの町中の人がイエスを信じた。きょうのテキストはざっとこのような内容です。

<井戸の水を汲みに来る女>

イエスが井戸端にすわっていた。旅に疲れてイエスはへとへとだった。イエスが疲れたと書いてあるのは福音書ではめずらしいことです。ここをとりあげて疲れていてもサマリアの女に個人伝道をした、疲れていても頑張ろう、イエスを手本にしようという説教を聞いたことがあります。まあそれもありなんでしょうけれど「サマリアの女」の話はなかなか手が込んでいるというか単純ではない。まず、イエスと女を一对一にするために人払いします。弟子たちは買い物にいったと。どこに行ったとは書いていないのでわからないけれど、イエスをひとりにして買い物にいった。水筒ぐらいおいていけばいいのに、暑いんだから。でも水筒がないおかげで話は始まります。

<ヤコブの水とイエスの水>

二人の対話は井戸端でおこなわれます。井戸の持つ深淵のイメージはこの対話の内容のもつ深さに通じています。そのうえ井戸の水といってもただの井戸水ではなくてヤコブの井戸の水、すごい水なんだと。だから、あなたはヤコブより偉いのかなんてセリフもでてくる。二人の間にある井戸をはさんで「ヤコブの水 vs イエスの水」という構図にもなっています。

問答の中でイエスのいっているいのちの水というのはたとえの話で、実際の水じゃないことがあきらかになってくる。女はそのことに気づかないでそのイエスの水を欲しがった、とする解釈もあります。

4:15 女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」

毎日水汲みにこなくてもいい、だからその水をください、という解釈です。でもね、水は飲むだけじゃなくて料理にも使うし、洗濯にも使います。いのちの水が手に入っても水汲みは毎日やんなきゃいけないでしょ、女はよっぽ

ど水汲みが嫌いなんでしょうか。それはお昼に水汲み来るようなみじめな境遇にあるからだと言えます。（水汲みは朝か夕、暑い日中はやらないのが普通）伝統的には女はふしだら女、身持ちの悪い女、男運のない女などなどと言いは違えど性悪な女として解釈されています。それは結婚を5回もして、いまは同棲しているという理由からです。しかし、歴史的解釈もあります。北イスラエルがアッシリアに滅ぼされた後、異邦の五つの町の住人がサマリアに移住して来て、地元のイスラエル人と結婚し、自分たちの神々を拝むようになった（列王記下 17:24-34）。五つの町のたとえとして「五人の夫」といっている、五回の結婚をアッシリアによるサマリアの人種的・宗教的混乱、蹂躞の象徴とする解釈です。六人目、いまの同棲相手はローマ帝国と解釈することもできますし、宗教的観点からはサマリア教（ユダヤ教からすれば異端）いわば未公認宗教を信仰している、それをたとえて正式な結婚ではなく同棲しているとする解釈です。1回2回ならともかく5回も結婚・離婚をくりかえすことは現代でもそうあるものではありません。この件についてはたとえとしたほうが解りやすし、女は不貞であったとする伝統的な解釈は強引なかんじがします。

<イエスとの対話>

女は「夫をつれて来い」といわれて、サマリア人の礼拝場所とユダヤ人の礼拝場所が違うことについての礼拝論をふっかけます。それに対しイエスは場所なんか問題にならない、「霊と真理」がまことの礼拝だと諭します。

4:23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。

19-24 節の礼拝論議はとても奥深い内容をはらんでいます。にもかかわらず女は難しい内容をただちに理解したかのように続く 25 節で更にキリスト論でイエスに反駁する。そこでイエスがキリスト宣言をする、なにいつてんの私とそのキリストだよってことですね、それで二人の会話はおわる。

<ちょっと横道>

「霊と真理の礼拝」はわたしたちせかんどチャーチの「ひとり礼拝」の根拠です。ハコはいらない（教会堂はいらない）からだは神殿。だからどこでも礼拝。いつでもどこでもできる。そのうえ、礼拝しているときにはイエスさまもいっしょ、出席なさっている、だからひとりでも「まことの礼拝」はできるといことです。

<二日間のサマリア滞在>

女は会話が終わると水がめをおきっぱなしにして戻り、町中にキリストがきたぞーってつげ回る。すると町の人々はみな信じた。

この話にもしかけがあります。ひとつ前の三章のエルサレムでの話（議員ニコデモとの会話が中心です）洗礼をきっかけにファリサイ派の追求がはじまりイエスはガリラヤに退いた。そのガリラヤへの旅の途中に二日間サマリアに滞在した。このサマリア滞在の日数は三日目の復活の暗示となっています。

死んで黄泉にくだり三日目に死人のうちから蘇り…（使徒信条）

エルサレムを追われてサマリアにくだり二日とどまり、三日目にガリラヤに行くという行程をイエス復活になぞっています。使徒信条では「黄泉にくだり」というのは伝統的には十字架の金曜日から復活の日曜日の朝まではイエスは黄泉で死人に福音を説いていたとします。（ただ、この伝統的解釈は現代のカトリック、プロテスタントともに受け入れない傾向にあります）信条の解釈はひとまずわきにおいておいて、イエスのサマリア伝道はこの黄泉下りの期間に相当します。

<さいごに>

サマリアの女との対話は深い真理を含んでいます。ヨハネ福音書はテキストの背後にいろいろな意味が隠されているとりわけ神秘的な福音書という特徴があります。

4:27 ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何か御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と

言う者はいなかった。

先週は変容したイエスを見たペトロは小屋を建てましようといったのですが、きょうのテキストで弟子たちはなにも言わなかった、とわざわざ用例まであげて記されています。弟子たちはイエスが女性としゃべっているのに、驚いて何もいえなかったと説明します。当時のユダヤ社会では女性と二人きりでしゃべるといことは不道徳（性的というより女性差別にもとづく）とされていて、ましてラビ（宗教指導者）が・・・という感覚があったと注釈にはあります。これに基づいて、弟子たちはまず驚いたけれどよほどの事情があるのだろうと察して無言だったのだという解釈です。

いろいろ調べていたらウルトラ解釈・とんでも解釈がありました。このサマリアの女は霊体だということです。弟子たちには声はすれども姿は見えない状態だったつまり女は霊のからだだったという解釈です。先週登場したモーセとエリアもいってみればみれば霊体です。わたしたちの朗読の日課でいけばペトロたちは先週は霊は見えていたけれど、今週は見えなかった。

まあ、井戸には幽霊がつきものです。わたしはこのサマリアの女＝霊のからだという解釈がとても気になります。サマリアの女が霊であるとしての記事を読み返してみるとごちゃごちゃした背景やら難しそうな神学論争もすーっとわかる。サマリアの女が霊体だったとするとイエスが語る霊のレベルの話（わたしが与える水⇒聖霊⇒永遠のいのち）が理屈ではなくわかってくるように思います。どうぞ皆さんもあとで「女＝霊体・幽霊」という視点でもう一度きょうのテキストを読み返し聖書の神秘にふれ、味わってみてください。主に感謝、そしてみなさまの上に主の平和がありますように。